

瀬戸内海の海を西に西に、門司、下関へと進み、九州の西海岸を南へ玄海の荒波をかきわけ進んだ。「六甲丸」は木の葉のようにゆられ、九尺四方に分隊十二人、装具があり、身動きも出来ない状態でした。

九州もみえなくなり、船は南へ南へと島一つ見えない海を何日も過ぎ、台湾がみえて来ました。その頃、海になれない自分は何日も食欲がありませんでした。長い十一日間の船旅ののち、南支香港がみえ、さらに南支第一の珠江がみえてきました。

海かと思われる河で船から上陸すると、素足の支那人ばかり、野も山も木もない、芭蕉の林で、大陸にきたように思われました。広東市外の西村に着きここが鳳八九六四部隊で、大隊長は笠柄徳一大尉でした。自分等は機関銃中隊安田中尉、教育係として田村軍曹、横井伍長、塩山兵長、田和上等兵です。

一月とはいえ南支は暑く初年兵教育がこれからつづきました。毎日が内地と同じで初年兵教育はつらい。今日一日だけは無事におわるよう毎日郷里の氏神様の方に向かって手をあわせるのであった。友達が悪くても初年兵

が叱られるなど自分の人生ではじめてでした。

十か月の軍隊生活、いよいよ自分等の帰る日が来ました。昭和十二年兵以前の者は帰ることになり、今度は七千五百屯の「コロンビヤ丸」に乗船、三隻の船団で進むと島影から敵機二機が船を目掛けてうってくる。この時に自分は二人で対空艦視に立ち、戦友の武田に弾があたり戦死されました。その時、十数人の死者も出ました。船は飛行機で護衛され長い船旅ののち、広島宇品に帰って来ました。

名古屋中部第二部隊に帰り家に帰ることが出来ました。これが南支派遣軍の第一回召集の軍隊生活の一部です。

私の体験

愛知県 鈴木勝美

私は昭和十八年十月二十日、二年間の陸軍少年通信兵学校教育を終わり卒業、同時に南支派遣第二十三旅団通

信隊付として配属された。昭和十九年五月から湘桂作戦に七か月間従軍、約二千キロの作戦行動をした。

そのなかでとくに印象に残っているのが蒙漢の激戦である。蒙漢とは珠江の上流で一方は川、三方が山にかこまれた要衝で、この地に中国正規軍三個師団が集結しており、天然の要塞と思われる地形である。ここをおとすため歩兵の水野部隊が渡河して攻撃をした。私は通信隊副分隊長として隊員十二人で派遣され、歩兵部隊と行動を共にした。

渡河作戦により蒙漢に進攻したものの、中国正規軍三個師団の反撃はものすごく、歩兵部隊は完全に包囲され孤立した。戦死者がぞくしゅつ、我が通信分隊十二人にも迫撃砲弾が直げき、二人の戦死者を出した。そのおり、通信器材にも被害を受け受信機用予備乾電池をやられ受信不能におちた。

送信機は無事だったので司令部へ状況報告は出来るが、司令部からの命令は受信できない。SOSの連続だった。

この状況が約一週間つづき歩兵部隊も半数以上が戦死

または負傷し、食糧もなくなってきた。

砲撃とP38双胴戦爆機がかんだんなく上空を飛び、昼間は行動出来ない。通信用アンテナを張ると、すぐ砲撃がくる。どこでみているのかと思った。アンテナも樹木の間張り電力を出来るかぎりおとして送信した。

このままでは全滅してしまう。なんとか通信連絡をとらなくてはと、分隊長とも相談、私ほか一人の二人で約十二キロ離れた本部へ連絡(乾電池受領)に行くことにした。周囲を完全にかこまれたなかから出るので必死でした。十二キロを一昼夜かかって通信隊本部へたどり着き乾電池一セット受けとり、状況を司令部に報告した。

そのころ、援軍三個大隊が蒙漢に向かうと聞いた。私ら二人にも歩兵一個小隊を護衛につけていただきなんとか分隊に帰りついた。

その後、送受信も完全に出来るようになり、後続部隊もぞくぞくと到着、応援にきてくれ、中国軍を後退させることができた。

今思えばよくいのちがあったと思う。歩兵部隊は半数以上が戦死または負傷した。わが通信隊の十二人中にも

戦死者を出した。今でもまぶたに浮ぶ。
ご冥福を心からお祈りいたします。